

令和元年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

令和2年3月

公益社団法人日本写真家協会

令和元年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

令和2年3月

公益社団法人日本写真家協会

1 はじめに

2001年、物故写真家の「写真原板の保存の必要性」を提唱してから19年になる。内閣官房長官、文部大臣、法務大臣を歴任された森山眞弓先生に相談し、文化庁に「日本写真保存センター」の設立を要望したのが2006年、ほどなくして文化庁から「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」の委嘱を受け、調査研究を始める（2007年）。写真発祥の地フランス、イギリス、アメリカの施設（アーカイブ）の調査に出かけ、各国における写真保存の実態を調査する。

2010年には収集した原板を保存する収蔵庫について文化庁と協議を開始し、本格的な収集調査とアーカイブ機能を持った施設を立ち上げた。予算も増額され、ようやく写真原板のデータベース化が軌道に乗り利活用を始めるまでになった（2011年）。

2019年から日本写真著作権協会の作業事務所を借りて、収集原板の整理、データベースの作成など作業効率を高めている。原板の収集も順調に進み、今日では「日本写真保存センター」の存在が全国に広まり、写真原板寄贈の申し出を受けるまでになった。

さらに、内閣府知財本部の肝いりによる文化資産の検索機能をもった国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」（国立国会図書館運用）の試験版の運用が開始され、写真分野ではじめてこの組織の一員として参画し、私たちが収蔵している国宝、重文を含む重要な文化財の原板や日本人の営みを捉えた写真のデータベース化の促進を図り、地域の資料館などとの連携活用が求められるようになったことは喜ばしい。

さて、私事になりますが、このたび令和元年度の文化勲章の栄に浴することになり光栄至極です。これも偏に写真界の皆様の力添えによって実現できた著作権の死後起算延長や写真美術館の設立、写真保存センターの活動など、写真文化の発展に寄与できたことに感謝している。この場をお借りして御礼申し上げたい。

これまでが助走だとすれば、これからが「写真の力」を発揮する場に躍り出ることになる。「継続は力なり」を実証する 때가迫っている。

田沼 武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長）

目 次

1	はじめに	3
2	本調査の概要	6
2.1	調査研究テーマ	6
2.2	調査研究の趣旨	6
2.3	調査研究の内容	6
2.4	調査研究計画	6
3	調査研究の実施計画	7
3.1	業務題目	7
3.2	実施時期	7
3.3	当該年度における業務実施計画	7
4	業務実施体制	9
4.1	課題項目別実施期間	9
4.2	調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	10
5	本年度収集・調査した写真原板について	11
5.1	本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数	11
5.2	本年度収集・調査した写真原板 総論	13
5.3	調査した写真原板詳細	15
5.4	渡辺義雄 写真原板受け入れ調査報告	20
6	本年度行った写真原板データベースの改良	24
6.1	本年度作業概要	24
6.2	本年度作業詳細	25

7	連携調査	36
7.1	写真原板データベースとジャパンサーチとの連携について	36
7.2	連携データ作成作業	37
7.3	画像サーバーの設定	38
7.4	写真原板データベースの導線の見直し	38
7.5	連携の効果	39
7.6	まとめ	39
8	情報発信、その他	40
8.1	本年度の情報発信と利活用	40
8.2	「日本写真保存センター」セミナー	42
9	支援組織	45
9.1	保存センターと支援組織について	45
9.2	支援組織の経緯について	46
9.3	支援組織の支援内容について	46
9.4	支援組織の「台東作業分室の設置」支援について	47
9.5	その他の支援状況	47
10	まとめ	48
図 版		49

2 本調査の概要

2.1 調査研究テーマ

文化的、歴史的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）が散逸、遺棄されるのを防ぐため引き続き、写真原板の収集・調査を行うと同時に、昨年度から実施している「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」を行い、利活用に適した閲覧用のデータベースの実現を目指す。

2.2 調査研究の趣旨

わが国の貴重な文化財および日本人の暮らしや日常を撮影した写真原板の収集・調査と、収蔵写真原板の利活用を行うためのデータベースの構築を行う。利活用を行うための閲覧・検索用のデータベースの運用を円滑に行うための調査研究を行う。

2.3 調査研究の内容

データベースの運用にあたっての課題を明らかにするため、以下について調査研究を行い、運用の適正化並びに利活用にあたっての方策を検討する。

2.4 調査研究計画

①諮問会議の実施

調査研究を行うにあたり、写真史、保存技術、権利処理、利活用、アーカイブに関わる専門家による諮問会議を実施し、当施設の基本理念、具体的な活動方針を図るための会議を開催する。

なお、データベースの構築および保存技術については、専門家による分科会を設け作業を進める。

②調査委員会の設置と写真原板の収集保存

調査委員会を立ち上げ、写真原板所有者の元を訪ねて写真原板の収集を図る。すでに行ってきた1945年から1970年代の収集、調査に加え、1945年以前の写真原板の収集も行い、わが国の歴史的に重要な時代の世相をとらえた写真記録も積極的に収集し、写真の充実を図り内容に厚みを加え、利活用の利便性の向上を図る。

③写真原板の収集基準と保存方法

激動した時代の世相を記録した原板を重点的に収集する。

収集する原板は写真集や印刷物等で公表されたものを優先する。

収集した原板はクリーニング、調査を行い完了した原板を中性紙の包材に入替え、長期保存を図るため、相模原のフィルム収蔵庫で保存する。

④写真原板の利活用

原板のデータベースを構築するために、近現代史に詳しい人材の登用を図り、内容の充実を行う。

データベースの利活用にあたっては、著作権等の権利処理を行い、公開、非公開などのほかに近年とみに課題となっている対象物の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な利活用の指針を構築する。

3 調査研究の実施計画

3.1 業務題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」（「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む）

3.2 実施時期

平成31年4月契約締結日から令和2年3月31日まで。

3.3 当該年度における業務実施計画

(1) 写真原板の収集調査

写真原板の収集は、前年度から引き続き1945年から1970年代のもの、1945年以前、1970年以降の時代を克明に記録した歴史的文化的に貴重な原板（写真フィルムとガラス乾板等）を対象とする。

これらを撮影した写真家の多くは既に物故されているため、遺族（著作権継承者等）および関係者、関係機関から収集を図る。

(2) 原板の劣化

わが国は写真原板の長期保存には適していない環境であることは、これまでの周知活動で、多方面で認知されるまでに至っている。

遺族等のもとから収集した写真原板は、チリや埃をクリーニングし、フィルムの劣化（ビネガーシンδροーム）の有無をA-Dストリップ検査試片を使って調べ、レベル0.5以下の原板を、中性紙の包材に交換して収蔵している。A-Dストリップレベル0.5を超えるものは乾燥した空気のもとで酢酸臭を飛ばし、保存するかどうかの判定を行ったうえで、長期保存を図る。

(3) 原則寄贈から寄託へと収集範囲を拡大

保存センターが収集する写真原板は、原則寄贈としているが、遺族によっては寄託を望む声もあるところから、重要原板については寄託もやむなしとして受け入れている。寄託期間は数年程度とし、それ以降は寄贈に切り替えられるよう要望する。

(4) 原板の密着（コンタクトプリント）

収蔵する前に、原板に何が写っているか撮影対象が何であるかが判定できるように、35ミリフィルムでは36枚を1単位として、原板をスキャニングして、コンタクトプリント（密着）を作成し、画像の内容を確認している。密着からは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見しどんな感動を覚えたかの印象を掴むことは、作家研究や作品の制作過程を研究するために必要な作業である。アーカイブでは密着は原則非公開であるが、特別な研究者等には保存センター内で閲覧できるようにしている。

(5) アーカイブ構築に向けてのデータベース

平成26年度から整備を進めている検索システム「SAI-CHI」について、収集している写真原板のデータ

ベースの基本は管理用データベース（写真原板台帳）を構築することが必要で、これを元に公開、閲覧用のデータベースを作成し、ネット上での閲覧、検索が行えるようにしている。昨年度の実証実験で課題のあった箇所修正と、利用者の閲覧、利便性などのチェックを行い、指摘のあった部分の改良を終え、閲覧用データベースを完成させた。現在閲覧できる画像数は約6,800点である。

(6) 写真原板の利用と広報

台東の新しい保存センター作業室では、「後世に遺したい写真」展から18点の作品を選んで、多目的室で展示している。来訪者が目にする歴史的写真群に、保存センターの収集目的を説明するのに役立っている。年に2回ほど展示替えをしてアピールしている。

今後もこうした広報活動を積極的に行い、写真原板の劣化予防対策と保存の重要性をアピールすることにした。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

4 業務実施体制

4.1 課題項目別実施期間

実施月	事 項	内 容	備考
4月	収集 ウェブサイト会議	ホレス・ブリストル、片山攝三 特集サイト打合せ・令和元年度計画	東京、福岡
5月	諮問調査委員会議 支援組織会議 ウェブサイト会議 調査	平成30年度事業報告・令和元年度年間計画 平成30年度事業報告・令和元年度年間計画 特集サイト打合せ 大橋治三、笹本恒子、山口直	埼玉
6月	保存 保存センター委員会 調査	写真原板の収蔵(国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫) 令和元年度計画 緑川洋一、高木康允	神奈川 岡山、東京
7月	データベース会議 保存センター委員会 情報発信 権利処理 収集	令和元年度データベース改修作業計画 「今後収集すべき原板の写真家リスト」作成 ジャパンサーチとの連携打合せ ジャパンサーチとの連携について権利問題検討 山口直	東京
8月	収集 権利処理 権利処理 保存センター委員会 情報発信 ウェブサイト会議	西川孟、渡辺義雄 ジャパンサーチと連携契約締結 岩波文化財写真利用に係る権利処理検討 「今後収集すべき原板の写真家リスト」打合せ ジャパンサーチとの連携開始 特集サイト打合せ	京都、東京
9月	諮問調査委員会議 支援組織会議 調査 保存センター委員会 データベース会議	令和元年度上半期報告・下半期の計画 令和元年度上半期報告・下半期の計画 岩宮武二、菊池俊吉、高野伸二 「今後収集すべき原板の写真家リスト」打合せ データベース改修打合せ	兵庫、東京
10月	収集 データベース会議 保存センター委員会	高田昭雄 データベース改修進捗状況確認、打合せ 「今後収集すべき原板の写真家リスト」打合せ	岡山
11月	保存 情報発信 情報発信 調査 保存センター委員会	写真原板の収蔵(国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫) 国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫見学会 センター活動紹介用のA3リーフレット作成 島内英佑、片山攝三 今後の情報発信方法および利活用方法検討	神奈川 神奈川 東京、福岡
12月	収集 保存センター委員会 調査	高野伸二、西川孟、島内英佑 利活用方法検討 凸版印刷株式会社 板橋工場見学、長野重一	東京、京都 東京
1月	寄贈 収集 保存センター委員会 データベース会議	恒成重康資料を東京都写真美術館へ寄贈 清水清 page2020オープンイベント「日本写真保存センター」セミナー打合せ データベース改修進捗状況確認、打合せ	東京 東京
2月	収集 情報発信 保存センター委員会 情報発信 保存	西川孟、岩宮武二 page2020オープンイベント「日本写真保存センター」セミナー開催 ジャパンサーチでの情報発信方法打合せ デジタルアーカイブ学会「ミュージアムとジャパンサーチ」講演 写真原板の収蔵(国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫)	京都、兵庫 東京 東京 神奈川
3月	報告書作成	令和元年度事業報告	

4.2 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施体制

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)
野町 和嘉(公益社団法人日本写真家協会会長)
松本 徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)
山口 勝廣(公益社団法人日本写真家協会専務理事)
飯島 幸永(公益社団法人日本写真家協会理事)
瀬尾 太一(一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

諮問・調査委員会

諮問・調査部門

委員	金子 隆一(写真史家)
委員	北村 行夫(虎ノ門総合法律事務所・弁護士)
委員	白山 眞理(一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長)
委員	大亀 哲郎(日本ユニ著作権センター企画室主任研究員)
委員	高橋 則英(日本大学芸術学部写真学科教授)
委員	多田 亜生(編集者)
委員	田良島 哲(東京国立博物館博物館特任研究員)
委員	丸川 雄三(国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授)
委員	山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)
委員	吉田 成(東京工芸大学芸術学部写真学科主任・教授)
補助員	内堀 タケシ(公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	寺師 太郎(公益社団法人日本写真家協会会員)

調査作業部門

調査員	河原 健一郎
調査員	中川 裕美
調査員	笛木 諭
調査員	渡邊 英雄
調査作業員	天沼 辰男
調査作業員	幸田 沙也子
調査作業員	中辻 利枝子
調査作業員	町田 清貞

事務局長 小泉 洋一

5 本年度収集・調査した写真原板について

5.1 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数

5.1.1 写真原板資料受入概要

本年度は9名・団体、約24,229点の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。なお各原板の詳細は5.2で紹介する。

表1 令和元年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		内容
		初期調査未 点数	初期調査済 点数	
片山攝三	2019年4月15日	—	2,112	昭和の文化人、仏像
ホレス・プリストル	4月18日	271	—	1940～50年の日本、アメリカの風景
山口直	7月31日	—	197	1970～90年代の産業技術等
西川孟	8月22日 2020年1月15日 2月6日 2月13日 2月19日	12,492	—	「桂離宮」「京都御所」「龍安寺」 「西芳寺」などの庭園や建物
高田昭雄	2019年10月18日	250	—	『橋脚になった島』『水島の記録』など
高野伸二	12月24日	—	3,659	野鳥写真
清水清	2020年1月17日	4,000	—	植物写真など
岩宮武二	2月17日	947	—	『ポロブドゥール』、大阪でのスナップ
島内英佑	2月17日	301	—	1970～2000年代の吉野川
合計9名		18,261	5,968	

5.1.2 相模原フィルム保存庫入庫内容

本年度の相模原フィルム保存庫への入庫作業は2019年6月13日、11月14日、2020年2月28日の3回行い、計8,501点の原板を収めた。写真原板の入庫内容を表2に記す。

表2 令和元年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数
川上重治	879
渡辺義雄	5,935
岡村崔	420
若目田幸平	50
岩波写真文庫	150
笹本恒子	1,067
合計6名	8,501

5.1.3 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで79名・団体、約332,438点の写真原板資料を受け入れた。そのうち相模原フィルム保存庫へ収めた写真原板は91,030点。未処理の写真原板は241,408点。年度別の各作業処理数は表3の通り。また、調査を開始してから現在までデジタル化した写真原板の数は40,516点になった。

表3 年度別各作業処理数（2020年2月28日現在）

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	未処理数
平成21年度	28,712	—	28,712
平成22年度	25,626	—	54,338
平成23年度	41,203	—	95,541
平成24年度	4,470	8,901	91,110
平成25年度	3,523	15,139	79,494
平成26年度	40,258	24,179	95,573
平成27年度	61,523	7,210	149,886
平成28年度	11,000	5,263	155,623
平成29年度	91,551	9,229	237,945
平成30年度	343	12,608	225,680
令和元年度	24,229	8,501	241,408
合計	332,438	91,030	241,408

笛木 諭（調査員）

5.2 本年度収集・調査した写真原板 総論

令和元年度収集した写真原板

収集した原板で特筆できるものに、京都で活動されていた西川孟さんの「桂離宮」や「京都御所」「京の庭園」などをはじめとするわが国の文化的建造物から庭園、造園を捉えた写真は遺族の真摯な熱意によって遺された原板群で、かけがえのない財産である。

また、わが国の近代産業の発展ぶりを記録した山口直さんの写真も貴重である。さらに学術的に貴重な記録写真、高野伸二さんの「日本の野鳥」や清水清さんの「食虫植物」といった図鑑用に最適な写真もある。これは今後教科書や指導書、副読本など教育関係での利活用が見込まれることを見越しての収集である。

西川孟(1925～2012)の写真人生

土門拳の写真術や人生観に心酔した愛弟子の西川孟が撮影した写真原板を遺族の西川香代から寄贈受けた。

代表作の『桂離宮』をはじめ「京都御所」、「仙洞御所」、「龍安寺」、「西芳寺」、「京の町家」、「冷泉家」、「角屋」、「姫路城」、「伊勢神宮」など、日本の文化史に燦然と輝く建築物や庭園などを撮影している。

西川が大阪でコマーシャル写真を撮っていた時、土門拳の『室生寺』の写真集に出会い、写真とはなにかを突き詰めるために1961年36歳の時、弟子入りした。あるとき土門さんと話す機会があった、西川は「自我を否定し、先入観を捨て去り、自分が小さくなって被写体の中に消滅したときに写真が撮れる」と話したところ、「その通り。俺は25歳の時そのことが分かった」という。また、西川は「人生と写真は同じ。土門さんのものをつくる人間の生き方を学んだ」と語る。

彼の写真は恐ろしいまでの存在感、触覚さえも刺激する、質感を描写している。障子紙、古文書、木目、壁、釘隠しなどあたかもその空間に立つかのように「時空間」を共有する。「自分の意見を押し付けるのではなく、被写体の声を写す」、「主観を押し付けず、見えてくるものだけを写す」とも述べ、日本人の美意識「雅」「あわれ」「幽玄」「わび」などを写し撮っている。

近代産業遺産を記録した山口直(1937～)

古くから伝わる技術を受け継いで、今日の科学技術の発展過程を記録してきた山口直。明治以降、西欧技術の導入が進み、日本人のたゆまぬ努力と勤勉さが、今日の産業立国を生み出した。

山口が撮り続けてきた著作の中に『技術史の旅』（産業考古学者の飯塚一雄、1985年）がある。琵琶湖の疎水から箱根用水、筑後川の揚水車、錦帯橋のアーチ式橋梁技術などを捉えてきた写真原板が寄贈された。

琵琶湖と京都を結ぶ疎水

琵琶湖と京都を水路で結ぶ構想は、江戸時代からあった。これは京都の経済を支える大動脈だが、途中に逢坂山や日岡峠があって難しかった。1881（明治14）年に着任した京都府知事北垣国道は、琵琶湖の豊富な水力を活用し水路だけでなく水車動力による工業を振興する計画を練り上げた。1885（明治18）年隣接する府県との利害関係の調整を終え、疎水工事に着手。大津の湖岸三保ヶ崎の取水口から常時一定の水量を確保するための制水閘門を設け、三井寺観音堂下から2,436メートルの隧道など3つの隧道を掘り進め、4年

半かけて南禅寺脇の舟溜まり、岡崎公園前の掘割りまでの疎水を完成する。ここには舟を運ぶインクラインや水路途中にベルト式水車による水力発電所を設けるなど、京都の近代工業化を推進した。現在は南禅寺脇のレンガ造りの2重アーチ構造の水路橋や山科運河の遊歩道、インクライン跡などが観光名所として知られている。

筑後川の揚水車

大分と福岡県境を流れる筑後川。九州の穀倉地帯である筑後平野は、古くから大雨のたびに氾濫が起これば農民を困らせていた。日照りが続けば干ばつもあって、安定的な水利用は夢であった。福岡県朝倉郡朝倉町には田植えの終わった水田の向こうに、揚水用の木製の二連、三連式の水車がゆっくりと回っている。この堀川取水口付近には、灌漑用の揚水車がいまも活動している。水車は太い松丸太で作られた胴木と日ノ脚と呼ばれるスポークと、そこに水を受ける羽根板と柄杓を渡し、水を次々と流す仕組みになっている。その水車を二連、三連に繋ぎ、水を無駄なく利用するという工夫がされている独特の構造が、なんと日本的発想と形態的にも美しい構造になっている。木と竹で作られた水車は金属製のものに比べ強度も強いが、これを造る水車大工の後継者不足で、近年は金属製の水車に取って代わろうとしている。

錦帯橋のダイナミックな美しさ

橋梁の構造で特異なものに、刎木構造という特徴的な橋がある。なかでも良く知られているのが、岩国市の錦帯橋と大月市の猿橋ではなかろうか。

猿橋は中央本線猿橋駅から国道20号線を行って桂川（相模川上流）に架かる木造橋である。この橋の創建は鎌倉時代とも言われているが確証はない。

切り立った両岸の30メートルほどの間を結ぶ桁木を得るのは難しい。そこで考えられたのが刎木構造であった。両岸から約15メートルの刎木を3列4段重ねにして岸から突き出し、それを重ね合いながら中央部で連結し、荷重を分散させながら橋を造るといった特殊な工法である。

錦帯橋は岩国藩三代藩主、吉川広嘉の時代に造られたという。錦川は大変な暴れ川で何度も増水で橋が流されてきた。洪水に耐える堅固な橋として構想されたのが、長崎の石造アーチ式の眼鏡橋から、橋脚の石積みや河床の敷石技術を学び、強固な橋脚と刎木構造によるアーチ橋を完成させた。橋を河床から見上げると、橋のダイナミックな弧線の力強さ、複雑な木組が美しく、木造建築の粋を見ることができる。

世界遺産『ボロブドゥール』を撮った岩宮武二(1920～89)

9世紀中部ジャワ（インドネシア）に造営されたアジア最大の石造建築の仏教遺跡は、火山の大噴火によって千年近く、密林中に埋没した状態であった。近年ユネスコの調査に同行した岩宮武二によって、その全貌、方形基壇や回廊、円壇・ストウパなどが記録された。この調査記録の撮影原板の寄贈を受けた。

高野伸二(1926～84)の『日本の野鳥』(日本野鳥の会)

高野は昭和期の野鳥観察で優れた業績を残した鳥類研究家として著名である。氏が多年にわたって撮影してきた写真原板の寄贈を受けた。フィルムの保存環境があまり良くなかったために、初期に撮影された貴重な野鳥のポジフィルムの退色が進んでいたことだ。（補修をすることで使用は可能であるが）

学者や研究者が撮影された写真の多くが劣化の憂き目にあることが実証され、貴重な資料をどう保存するか
の対策を検討する必要性を感じている。

特に自然保護や環境への関心が高まるなか、保存センターでは保存方法に関する講習会やパンフレットの発
行などで、残されている貴重な資産をどう延命するか、長期保存の必要性和保存方法を啓発してゆきたい。

地域のドキュメントフォトに島内英佑の『吉野川ふたむかし』（1981年）と高田昭雄の『水島の記録』『橋
脚になった島』がある。「吉野川」は源流から河口までを数年にわたって撮り歩き、出会った人との会話を通して、
そこに住む人々の日々の営みを丹念に記録したものである。高田昭雄の写真原板はそこ水島に住む高田が日々
目にしてきた変貌する光景を記録し、近代化への歩みと環境破壊の現実を捉えたもので、いずれも残しておきた
い日本の姿を捉えた記録として収蔵した。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

5.3 調査した写真原板詳細

5.3.1 新規受け入れ

片山攝三（かたやま せつぞう） 1914(大正3)年 - 2005(平成17)年 シベリア生まれ。

1932年福岡県立中学明善校卒業。同年、東京の写真師、疋田晴久に師事。1935年、福岡市内で営業
写真の仕事始める。終戦後、福岡・観世音寺での仏像の撮影をきっかけに、九州大学美学美術史研究室
の仏像調査に参加。1960年代には、美術家、文芸家の肖像を集中的に撮影した。1967年、九州産業大学
教授に就任。

主な写真集：『日本の石仏』（朝日新聞社 1958年）、『観世音寺』（中央公論美術出版 1964年）、『国宝
富貴寺』（淡交社 1972年）、『芸術家の肖像』（中央公論美術出版 1994年）。

主な写真展：「カメラの眼 日本の石仏」（石橋美術館 1957年）、「現代美術家の肖像写真展」（日本橋三
越 1964年）、「片山攝三写真展 モノクロームの軌跡50年」（福岡県立美術館 1989年）、「芸
術家の肖像 片山攝三写真展」（三鷹市美術ギャラリー 1996年）。

主な受賞：第28回日本写真協会賞功労賞（1978年）、第11回福岡市文化賞（1986年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2019年4月15日に、135判と4×5判を中心に、2,112点を受け入れた。

○原板の内容

『片山攝三写真展 モノクロームの軌跡 50年』（1989年）に掲載された画像のなかの文化人のポート
レートと仏像の原板と控え。

○原板の状態

数十点はビネガーシンドロームの劣化により少し湿っていた。その内の3点は激しいカーリングを起こしてい
る。これら以外の原板に大きい劣化はなかった。

山口直(やまぐち ただし) 1937(昭和12)年 - 東京生まれ。

1960年日本大学芸術学部写真学科卒業。1960年、株式会社講談社に入社、写真部に配属。1962年、週刊現代編集部へ転属。1966年、株式会社講談社を退社。1967年、フリーカメラマンとして活動。講談社「小説現代」、学研「旅行ホリデー」、日立製作所「技術史の旅」などを担当。

主な写真集：『館林源右衛門作品抄：古伊万里のころ』(学習研究社 1983年)、『技術史の旅』(日立製作所 1985年)、『続 技術史の旅』(日立製作所 1997年)。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2019年7月31日に、135判カラーポジを中心に、197点を受け入れた。

○原板の内容

『日立』の連載記事「技術史の旅」に使用された原板。1978年3月～1994年8月に撮影された。土木、鉄道、電力、建築など様々な分野で使用されている専門技術について撮られている。

○原板の状態

原板に大きな劣化はなかった。

西川孟(にしかわ もう) 1925(大正14)年 - 2006(平成24年) 大阪生まれ。

1943年日本キリスト教専門学校中退。1950年、印刷所を経営する。このころより写真始める。1955年、大阪・日本橋テルキスタジオに主任として入社。1961年、土門拳に師事。「古寺巡礼」を中心として、関西での助手をつとめる。1966年、大阪・天満橋に事務所を開く。以後、文化財、寺社等を精力的に撮影。博物館資料の撮影多数。日本写真家ユニオン所属。

主な写真集：『桂離宮』(講談社 1977年)、『角屋』(中央公論社 1983年)、『殉教 日本キリシタン史』(主婦の友社 1984年)、『聖域 伊勢神宮』(ぎょうせい 1994年)。

主な写真展：「北京の看板 亀甲文字」(銀座ニコンサロン 1988年)、「西川孟 桂離宮 日本の美」(銀座ノエビアギャラリー 2014年)、他多数。

主な受賞：第十二回造本想定コンクール ユネスコアジア文化センター賞(1976年)、世界書籍展(東ドイツライプツィヒ)ブックデザイン賞(1979年)、日本写真協会年度賞(1985年)、第七回土門拳賞(1988年)、他多数。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2019年8月22日に第1回受け入れとして2,997本、2020年1月15日に第2回受け入れとして2,372本、2020年2月6日に第3回受け入れとして2,560本、2020年2月13日に第4回受け入れとして2,923本、2020年2月19日に第5回受け入れとして1,640本の、計12,492本を受け入れた。

○原板の内容

第1回受け入れが桂離宮、第2回が角屋、第3回が姫路城、桂離宮、仙洞御所、京都御所、第4回が伊勢神宮、龍安寺、西芳寺、日本におけるキリスト殉教者の記録、第5回が京の町家、冷泉家、日光東照宮、日本の美、成巽閣、三溪園、であった。

○原板の状態

原板の多くが4×5判カラーポジで、一部に褪色が見られる。写真集に掲載されたものとそれ以外に分別され、被写体内容、写真集掲載ページが細かく記入されている。

高田昭雄(たかた あきお) 1939(昭和14)年 - 岡山生まれ。

1955年玉島西中学校卒業。三井造船養生工となる。1959年、玉野市立玉野備南高校卒業。日本写真家ユニオン所属。石津良介氏に師事した後、中村昭夫氏、小松健一氏に師事。ヒマラヤ他多くの山岳地を撮影。上山棚田を30年以上にわたって写真を撮り続ける。

主な写真集：『橋脚になった島』(アトリエぶどうぱん社 2005年)、『水島の記録』(吉備人出版社 2016年)。

主な写真展：「三つの子どもの世界 四人展」(銀座ニコンサロン 1955年)、「消えた故郷-奥津-」(岡山市 2000年)、「橋脚になった島」(新宿コニカミノルタプラザ 2005年)、「よみがえれ千枚田」(新宿コニカミノルタプラザ 2014年)。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2019年10月18日に、135判モノクロネガおよび135判カラーポジを中心に、約250点を受け入れた。

○原板の内容

『橋脚になった島』および『水島の記録』他に使用された原板とそのコンタクトプリント。書き込みから1970～2004年頃に撮影されたと思われる。

○原板の状態

原板に大きなビネガーシンドローム他の劣化はなかった。カラーポジフィルムにやや褪色が見られた。ネガホルダーへは撮影日など情報が書かれており、写真展使用原板はまとめられていた。

高野伸二(たかの しんじ) 1926(大正15)年 - 1984(昭和59)年 東京生まれ。

1958年東京教育大学大学院理学研究科理学研究課程修了。公益財団法人日本鳥類保護連盟勤務。同理事、公益財団法人日本野鳥の会理事などを歴任。1972年、フリーランスの写真家となり、野鳥やクモの生態を撮影。野鳥の生態写真を一つのジャンルとして定着させた第一人者。野鳥を主とした調査・保護活動に生涯を通じて従事した。

主な写真集：『野の鳥の四季 高野伸二写真集』(小学館 1974年)、『原色・自然の手帖 野鳥』(講談社 1967年)、『野外ハンドブック・4 野鳥』(山と溪谷社 1978年)、『フィールド図鑑クモ』(東海大学出版 1984年)、他多数。

主な写真展：「野鳥生態写真展」(銀座小西六ギャラリー 1957年)。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2019年12月24日に、カラーポジフィルムを中心に、3,659点を受け入れた。

○原板の内容

約9割が野鳥を撮影したカラーポジフィルム。これらは『野の鳥の四季 高野伸二写真集』（1974年、小学館）や『カラー写真による日本産鳥類図鑑』（1981年、東海大学出版会）など鳥に関する出版物に使用されている。残りの原板資料は1955～1975年に撮影された135判モノクロフィルムでこちらもほぼ野鳥が写っていた。

○原板の状態

135判のモノクロフィルムのほとんどは軽度のビネガーシンドロームになっていた。また、その内の1割程はカーリングしている。

清水清（しみず きよし） 1924(大正13)年 - 1999(平成11)年 東京生まれ。

東京師範学校卒業。東京都立立川高校、東京都立武蔵高校、都留文科大学で生物学講師として勤める。1955年より写真家活動を始める。動植物の生態写真、特に食虫植物、富士山の生態系、ニワトリの発生（生態学）など発表多数。

主な写真集：『教材に準じた学習植物写真集』（北隆館 1957年）、『食虫植物』（誠文堂新光社 1966年）、『化学のアルバム たまごのひみつ』（あかね書房 1975年）、『植物の研究 植物たちの登山学』（あかね書房 1987年）、他多数。

主な受賞：第35回サンケイ児童出版文化賞 大賞（1988年）、第8回 吉村証子記念 日本科学読物賞（1988年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2020年1月17日に、135判カラーポジおよび120判カラーポジの、約4,000点を受け入れた。

○原板の内容

食虫植物、富士山の生態系、ニワトリの発生などの生態写真。各種図鑑、学習科学図書等への使用された原板もあり。動植物の種類別、生態別に作られた詳細な原板リストあり。

○原板の状態

褪色やカビの発生が散見される。

島内英佑（しまうち えいすけ） 1937(昭和12)年 - 高知生まれ。

1959年日本大学芸術学部写真学科卒業。同年、光文社写真部入社。1962年、光文社退社、フリーランスとなる。『アサヒカメラ』『フォトアート』『太陽』など、写真雑誌にフォトレポートを多く発表する。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、日本旅行作家協会常任理事、NHK文化センター講師。

主な写真集：『吉野川ふたむかし』（教育出版センター 1981年）、『Face and Voices of Papua New Guinea』（Bathurst, N.S.W., Australia : Robert Brown & Associates 1986年）、『いとしの町』（佐賀町 1990年）、『南半球冒険航海』（郵船クルーズ 2001年）、他多数。

主な写真展：「ボンジュール・パリ」（新宿ニコンサロン 1972年）、「フランスの詩」（三菱オートガーデン 1974年）、「南の風ーパラオ・セブ紀行ー」（東京 キヤノンサロン 他 1978年）、「吉野川ふたむかし」（銀座ニコンサロン 1979年）、他多数。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2020年2月17日に、135判モノクロネガ202点、135判カラーポジ99点の、計301点を受け入れた。

○原板の内容

1970～2000年代の吉野川流域の風俗を捉えたもの。写真集『吉野川ふたむかし』『セピア色の吉野川』の使用原板が含まれる。

○原板の状態

一部にカーリング、酢酸臭が認められる。ベタ焼きに、写真集使用セレクトと思われるマークあり。

5.3.2 受入継続中の写真原板詳細

昨年度までに受け入れた写真原板のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板について記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

ホレス・ブリストル(ほれす ぶりすとる)

○受入日と原板の数量

2019年4月18日、第4回受け入れとして120判モノクロネガ、271点を受け入れた。

○原板の内容

1940～1950年代の日本各地および、アメリカの風景。

○原板の状態

一部に銀鏡が認められる。

岩宮武二(いわみや たけじ)

○受入日と原板の数量

2020年2月17日、第2回受け入れとして135判モノクロネガ103点、4×5判モノクロネガ489点、4×5判カラーポジ348点、資料7点の、計947点を受け入れた。

○原板の内容

写真集『ボロブドゥール』に使用されたものおよび、大阪の街中のスナップ。

○原板の状態

一部に褪色、酢酸臭が認められる。

河原 健一郎（調査員）

笛木 諭（調査員）

中川 裕美（調査員）

5.4 渡辺義雄 写真原板受け入れ調査報告

5.4.1 総論

昭和を代表する写真家渡辺義雄は、スナップ写真・人物写真などで優れた作品を作り活躍したが、戦後は建築写真家として認められる存在となった。戦前の写真原板や資料類は、太平洋戦争の空襲で焼失。当センターでは、戦後撮られた主に建築写真関連の写真原板を受け入れた。

渡辺義雄の戦後から平成初頭まで、古いもので70年前の写真原板24,000点をご遺族から寄贈され、その調査を52ヵ月かけほぼ終了した。写真原板の一部には銀鏡やカラーの褪色といった劣化があるものの、概ね良好な状態であった。劣化が少なかった理由として、グラシン紙の包材に包まれていた、また褪色に強いコダクロームを使用が多かった、そして保存環境（温度・湿度）が良かったことがあげられる。

受け入れた大量の写真原板には書き込みが少なく、24,000点の写真原板を40冊以上になる出版物から使用されたものを特定させることは、容易なことではなかった。しかし、1,000点弱の画像を発見することが出来た（伊勢神宮400点、日本の塔430点、帝国ホテル50点、Tradition of Japanese Garden 30点など）。

昭和の時代の写真原板の管理に対する意識は低く、貸出したものが戻ってこないことも多々あったようだ。5,000点の写真原板がある「宮殿」「迎賓館」「東宮御所」では、出版物に掲載された写真原板を発見できないことが多かった。恐らく、作成の段階で出版社か諸機関に渡したままになっているように思われる。また同様に、5,000点の写真原板がある奈良六大寺・大和古寺関連でも出版物に使われた写真原板の特定はほとんど出来なかった。周辺調査をしてみると出版物に使われたものは出版元の岩波書店で保管されていたことが分かった。それ以外では、現在では入手が難しい書籍である、毎日新聞社「国宝」、彰国社「建築学体系」、講談社「図説日本の庭園」、筑摩書房「文化史」、などに使用されたとと思われる写真原板2,000点は残念ながら出版物との特定は困難となった。

5.4.2 使用写真原板について

写真原板は、93%が大判（5×7・4×5）そのうちカラーが58%、白黒が42%となる。基本は、カラーはコダックのコダクローム、白黒は富士フィルムのパックフィルムを主力として使用していた。不思議にも、同じ被写体に対してコダック、富士フィルム、アンスコ、さくら、を混ぜて使用や、同じ種類のフィルムでも異なるエマulsionナンバーのものを混ぜて使うなど、一般的には品質を揃えて撮影に臨む写真家が殆どなので、それに比べると考えづらい使い方をしている。渡辺義雄は、フィルムにあまり頓着しなかったのか、メーカーからの提供フィルムをテスト的に使用していたのかは不明である。

5.4.3 控え写真原板について

総写真原板数24,000点の内、1,000点が出版物と特定が出来、23,000点が控え写真原板として日の目を見ずにいる。控えの写真原板は、露出を変えたもの、カット違い、同じ構図でカラー白黒両方を撮影したものや複製などである。未使用のものも、構図・露出も適正な出版物に使用しても何ら遜色のない写真原板も多数あった。しかしそれも、一枚に絞り込こむ写真選定の段階で次点でお蔵入りになったものと思われる。

5.4.4 建築家と渡辺義雄

渡辺義雄と交流があった建築家として、堀口捨巳・丹下健三・前川国男・谷口吉郎、建築史家伊藤ていじ、などの諸氏がいる。端正で自然な作風が建築界の大物の眼鏡にかない、「建築写真は渡辺義雄」と評価される

こととなった。渡辺の建築写真は構図や露出に極端な強調がなく、実物を正確に捉えており、学術的な出版物の建築写真の指名を受けることになる。『奈良六大寺大観』の編集委員だった建築史家太田博太郎は、「写真という一つの手段を使って、建築の美しさを他の人に伝えてくれるものが欲しいのである。そしてできれば私たちの気のつかない新しい美を見つけてくれる写真家であって欲しい」という課題を、渡辺が見事にクリアする人物と述懐している。」(The Beauty of Japan Photographed The Japan Foundation 1998年 倉石信乃)

渡辺自身、建築物が好きであり、様々な建築写真を撮影した。特に木造の寺社建築にひかれ作品を撮ったことが、晩年建築写真家としての位置づけを確かなものとした。

5.4.5 写真集「日本の塔」について

渡辺義雄の晩年の著作として、渡辺義雄写真集「日本の塔 ―信仰とその象徴―」が1982年10月に毎日新聞社より出版されている。渡辺義雄75歳の時の作品である。この時期は、主な役職から少し引き名誉会長・名誉教授などの名誉職に就きそれまでの日々多忙な時期に比べ、時間に余裕が出来た時期と思われる。日本全国の仏塔を120ヵ所撮影することは、最低でも2年間を要し、時間的なゆとりが取り組みを可能としたと考えられる。

撮影地は、北海道から大分県までほぼ全都道府県をカバーしている。国宝・重文の対象となっているものはほぼ掲載されており、ほかは渡辺義雄が選定している。

「日本の塔」に掲載されている写真点数は455点、使用された写真原板と特定が出来たものが429点となった。16点が見つかっておらず、何らか写真原板の貸し出しで戻って来なく紛失したと思われる。40年前のものではあるが、写真原板がほぼほぼ特定できたのは、この写真原板の管理が良かったことによると考える。

カラー印刷のため、ほぼカラーフィルムで撮影され、その使用フィルムは4×5のコダクローム。保存状態が良かったお陰もあり、40年経過しているが褪色はほとんどしていない。この本の印刷精度は決して良いものではなく、この特定できた写真原板から改めて高精細印刷物を作成できたら、現代でも十分通用する学術文化研究への価値ある資料になると考えられる。

写真は、建築写真で定評ある渡辺義雄だけに、自然なたたずまいの仏塔がフィルムに写し込まれている。渡辺義雄は、雲など情景感が出るものを嫌い、建築物に集中した写真を選好した。(図1～3)

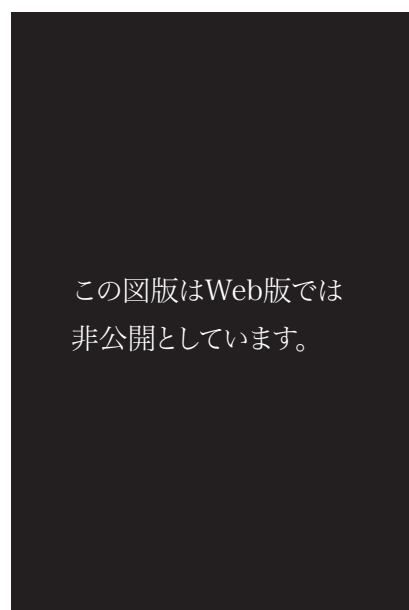


図1 醍醐寺五重塔全景

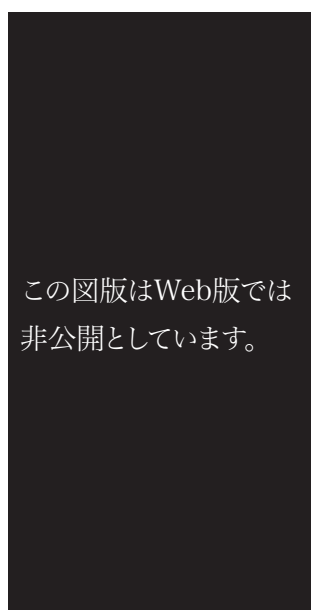


図2 醍醐寺五重塔側面

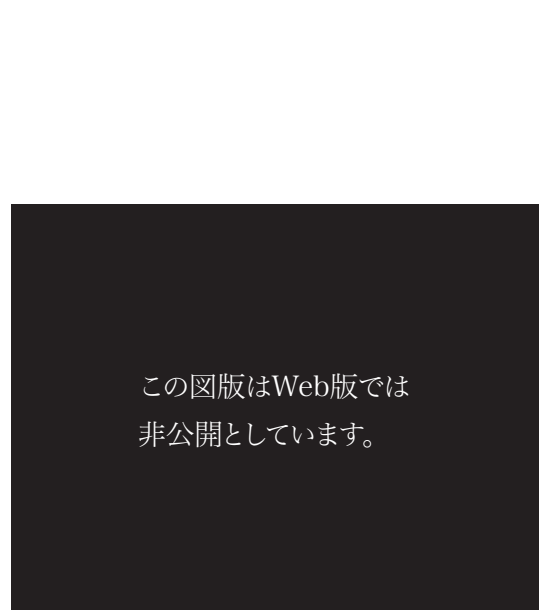


図3 醍醐寺五重塔初層

一方で、本の構成上の要請か、雪景色の浄瑠璃寺三重塔（図4）、夜桜と最勝院五重塔（図5）、上野動物園の来場者と旧寛永寺五重塔（図6）など情景感のある写真をあえて採用している所が面白い。

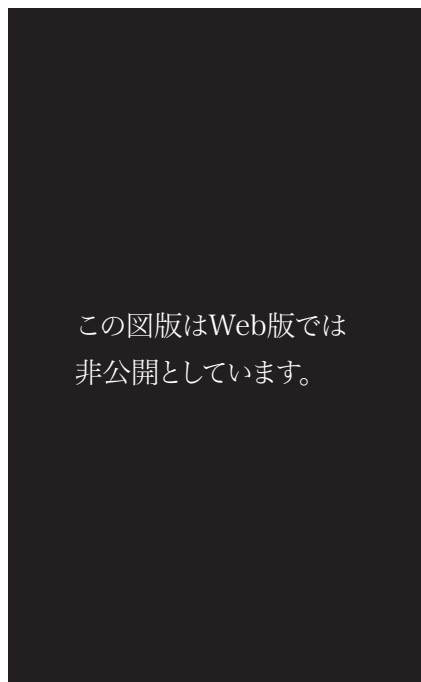


図4 浄瑠璃寺三重塔全景

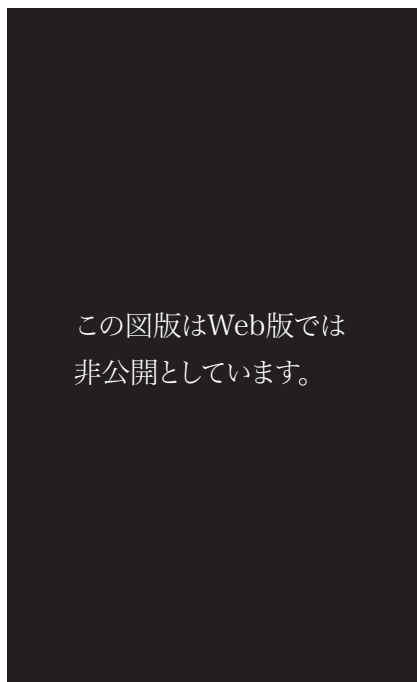


図5 最勝院五重塔全景



図6 旧寛永寺五重塔全景

初代新幹線0系と教王護国寺（東寺）五重塔が一つのコマに収まっている写真は、その時代でしか撮れない貴重なものとなっている。（図7）



図7 教王護国寺五重塔遠望

5.4.6 調査後の写真原板の公開について

当センターは、調査を行い写真集などに使用されたことが判明した写真原板の情報を「写真原板データベース」で公開している。そこでは渡辺義雄の写真原板情報を約1,000点載せているが、使用権の関係から寺社関連のものは基本的に文字情報のみとしている。ただし、伊勢神宮の写真については、その公開について神宮司庁と協議し、400点弱を写真と文字の両情報を当センターの写真原板データベースに掲載している。今後は、「日本の塔」に掲載の120ヶ所の寺社と連絡を取り、当センター所蔵の写真の公開について、許諾を得るよう進めていきたい。

5.4.7 今後の写真原板受け入れに向けて

当センターは、限られた人員と費用で運営されている。このためにも効率的な写真原板の受け入れが要請される。今回の受け入れ処理から以下の提言をしたい。

- ・歴史的文化的に後世に残す価値のある写真の選考
- ・出版物と紐づけされた写真原板の提供の依頼
- ・写真原板と出版物をセットでの寄贈の要請
- ・写真原板の劣化が始まる前の状態での受け入れ

20世紀初頭に「写真は千の言葉に優る」と言われたが、大判の写真原板は情報密度が濃く、「写真原板は萬の言葉にも優る」ものと言っても過言ではない。その映像情報が教育・文化研究・報道などに有効に活用される日が来ることを期待している。我々は、日本の歴史・文化に関する写真原板を将来に残すことは、いずれ未来の歴史文化研究に役立つ事と確信し、一つずつの手作業を、着実に進めていく考えです。

渡辺 英雄（調査員）

6 本年度行った写真原板データベースの改良

6.1 本年度作業概要

管理用DB、閲覧用DB共に、様々な形態の写真原板の管理を可能とするため、本年も機能の改良を行った。管理用DBについては、写真原板のより正確な情報を記録するための項目の追加や、作業者の誤入力や表記ゆれを防止するための改良を行った。閲覧用DBは、管理用DBの入力項目の追加を反映した変更および、ジャパンサーチとの連携に伴い外部サイトからの閲覧者の流入に対応するための改良を行った。

6.1.1 管理用DB

6.1.1.1 資料群マスター

日本写真保存センターの原板資料の受入れ方法は、寄贈、もしくは寄託の2通りであるが、従来では入力方式が自由記述方式であり、入力内容にブレが生じていた。そこで、「受入情報」の「受入方法」項目を、「寄贈」「寄贈以外」、からの選択式とし、原板受入れ情報が正確に入力できるよう改良を行った。

6.1.1.2 コママスター

従来のコママスターには、タイトルの入力項目が1通りしかなく、複数の媒体で写真が利用され、それぞれで異なるタイトルが付けられている場合、媒体ごとのタイトルを入力することができなかった。そこで、「タイトル」「キャプション」項目を掲載媒体ごとに入力可能とし、情報を正しく入力できるよう改良した。また、従来通り、被写体イメージを一言で表す項目が必要であるため、従来の「タイトル」「キャプション」項目の代わりに「名称」項目を新たに追加した。

「シリーズ名」項目は利用頻度が低く、誤入力防止のため、「詳細」タブ内に移動した。

「撮影者」に推定フラグを追加し、撮影者が明確ではないが、推定できるケースに対応した。

6.1.1.3 バックアップ時間の短縮

従来、バックアップデータの取得には30～40分程度の時間を要しており、バックアップデータの取得操作中に管理用DBへの入力作業が不能となるため、頻繁なバックアップ取得が困難で保守性に問題があった。今回の更新で、バックアップデータ取得時間が1分未満まで短縮され、頻繁なバックアップが可能となり、DBのより安全な運用が可能となった。

6.1.2 閲覧用DB

6.1.2.1 「所蔵」

従来、所蔵情報の表示内容は特別な場合を除いて「日本写真保存センター」と表示されており、表示内容に変更が生じた際にはその都度データベース構築の実作業を行っている凸版印刷株式会社に依頼する必要がある、情報管理上問題があった。今回の更新では、管理用DBの「受入方法」の入力内容と連動させ、寄贈の場合は「日本写真保存センター」、寄贈以外の場合は「表示なし（空欄）」とし、所蔵情報を正しく表示できるよう改良した。

6.1.2.2 推定フラグの表示

従来の閲覧用DBでは、管理用DBに入力されている推定フラグが反映されておらず、情報の確度に関わらず情報が一律に表示されており、正確性に問題があった。そこで、管理用DBのコママスターの「撮影者」「撮影場所」「撮影年月日」の推定フラグの入力情報を閲覧用DBにも反映し、推定される情報については（推定）と表示させることでより正確な情報が提供できるよう改良した。

6.1.2.3 「名称」「タイトル・キャプション」の表示方法の変更

管理用DBの更新内容を反映し、「タイトル・キャプション」項目を掲載媒体情報に移動し、媒体ごとにタイトル・キャプションを表示可能とした。また、従来の「タイトル・キャプション」に代わって、「名称」項目を追加した。

6.1.2.4 ジャパンサーチとの連携に伴うページ遷移の改善

従来の公開DBは、完全に独立したウェブサイトとして設計されており、閲覧者が外部サイトのリンクから流入した場合のページの挙動が想定されていなかった。ジャパンサーチとの連携に伴い、外部サイトからアクセスした場合であっても、スムーズなページ遷移が可能なるよう改良した。

6.1.3 管理用DBのOSの変更

Windows7のサポート終了に伴い、SAI-CHI管理用DBサーバーとして運用中のWindows7OSのPCをWindows10OSの新PCへ移行し、セキュリティリスクを低減した。

河原 健一郎（調査員）

6.2 本年度作業詳細

6.2.1 日本写真保存センターデータベース開発について

昨年度は、写真原板データベースの完成に向けて機能面の検討だけでなく、データベース運用環境を含めた問題点などの検討を行った後、開発項目の選定を行い、開発を行った。

今年度は、データベース環境のリプレースとジャパンサーチへの対応を行うとともに、昨年の改修内容をベースに運用上の問題点の解決を目的とした検討、開発項目の選定を行い、開発を行った。

6.2.2 管理データベースの更新について

管理データベースについて、運用上の問題点の解決を目的とした検討を行った結果、一部項目に関して修正していくべき点が出てきた。

日本写真保存センターと細かく協議をし、実際に修正すべき項目とそうでない項目をより分け、また、実装方法の検討を行い、修正開発を行った。

6.2.2.1 修正点

下記の点について、修正が必要となった。

(ア) データベース環境のリプレース：

これまでサーバとして利用していたPCのOSがサポート切れとなるため、データベース環境をリプレースする必要がでてきた。新たなPCを用意しデータベース環境のリプレースを実施した。

(イ) バックアップデータ取得時間の短縮：

日本写真保存センター内データベース環境でバックアップデータ取得に時間がかかる現象が発生していた。今後バックアップ頻度を上げたいため取得時間の改善を実施した。

(ウ) 資料群マスターに受入方法(寄贈・寄贈以外)の選択式入力欄を設置：

受入方法が自由記述方式入力となっているため表記の統一ができなかった。当該項目を選択式とし、表記の統一を可能とする修正を行った。

(エ) コママスターの入力内容変更：

シリーズ名、タイトル、キャプションがコマに対し1つだけしか入力できず、入力項目不足が問題となった。また、撮影者がはっきりしない場合に推定情報を付加したい場合が出てきた。そのため下記の修正を実施した。

(エ)-1) シリーズ名の移動と項目の追加：

シリーズ名の入力項目を詳細タブに移動し、名称項目を追加した。

(エ)-2) タイトルとキャプションの移動と統合：

タイトルとキャプションを掲載媒体タブに移動し、入力項目を統合した。また、掲載媒体ごとに入力できるよう修正した。

(エ)-3) 撮影者に推定フラグを追加：

撮影者に推定フラグを入力できる項目を追加した。

6.2.2.2 修正内容の定義

(ア) データベース環境のリプレース

Windows10Proがインストールされた新たなPCを導入し、ここにデータベース環境のリプレースを行った。

リプレースにあたっては、新たにDockerというコンテナ技術を使ったアプリケーションをインストールし、コンテナ上にデータベースの本番環境及びテスト環境を独立した形で導入した。

- 1) PCのセットアップ
- 2) Dockerのインストール
- 3) データベース本番環境、テスト環境コンテナの設置
- 4) 管理データベースシステムの最新プログラムの反映
- 5) 現行サーバからの置き換え

(ア)-1) PCのセットアップ

PCのセットアップとしてWindows10の初期設定、ユーザ設定を行った。

ネットワーク環境設定は現行サーバ置き換え時に正式な情報に切り替えるため、セットアップ環境用の設定を行った。

ログインユーザは SAI-CHI-10 とした。

テスト環境で利用するポート（8080）をファイアウォール設定で許可した。

Windows10の設定画面から設定の検索で「Windows Defender ファイアウォール」を開き、昨年同様の設定を行った。



図1 Windowsの設定

(ア)-2) Dockerのインストール

Docker（ドッカー）は、コンテナと呼ばれる**OS**レベルの仮想化環境を提供するオープンソースソフトウェアである。**VMware**製品などの完全仮想化を行うハイパーバイザ型製品と比べて、ディスク使用量は少なく、仮想環境（インスタンス）作成や起動は速く、性能劣化がほとんどないという利点を持つ（Wikipedia¹より）。

今後、同様の環境リプレースや、環境拡張時のあった際のリプレース容易性を考慮し、Dockerを導入した。

公式サイトよりインストールファイルをダウンロードし、インストールを行った。

公式サイトWindows版ダウンロードURL：

<https://hub.docker.com/editions/community/docker-ce-desktop-windows>

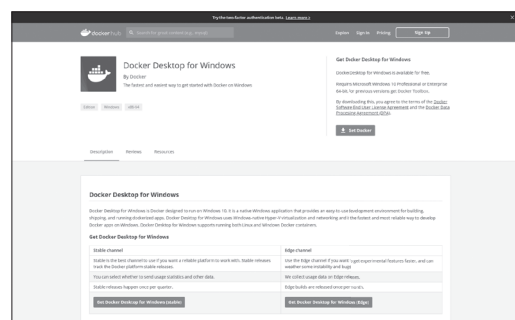


図2 Dockerダウンロードサイト

(ア)-3) データベース本番環境、テスト環境コンテナの設置

環境構築にあたってはまずコンテナの構成を作成した。

php.httpd等を動作させるphpコンテナ

mysql/mariadbを動作させるmysqlコンテナ

phpMyAdminを動作させるphpmyadminコンテナ（データベースへの直接メンテナンス用）

の3つのコンテナで構成することとした。

構築にあたっては、「docker-composeでPHP7.2 + Apache + MySQL + phpMyAdmin環境を構築²」

¹<https://ja.wikipedia.org/wiki/Docker>

²https://qiita.com/naente_dev/items/dea84c172deeff7d8

などのサイトを参考にした。

次に、それぞれの公式のdocker image（コンテナ作成のものになるファイル）を利用し、複数のコンテナをまとめて簡単に扱うためのDocker Composeの設定を行った。

Docker Composeは、複数のコンテナで構成されるアプリケーションについて、Dockerイメージのビルドや各コンテナの起動・停止などをより簡単に行えるようにするツールです。

...

Docker Composeでは、Dockerビルドやコンテナ起動のオプションなどを含め、複数のコンテナの定義をyamlファイルに書き、それを利用してDockerビルドやコンテナ起動をすることができます。一つの簡単なコマンドで複数のコンテナを管理できるようになります。

（さくらのナレッジ Docker入門（第六回）～ Docker Compose ～³より）

始めに本番環境用のdocker-compose.yml ファイルを作成した。動作確認後、ポートを変更することでテスト環境を構築した。

```
version: '3'
services:
  php:
    build: ./php
    volumes:
      - ./php/php.ini:/usr/local/etc/php/php.ini
      - ./php/apache2.conf:/etc/apache2/apache2.conf
      - ./php/000-default.conf:/etc/apache2/sites-enabled/000-default.conf
      - ./php/serve-cgi-bin.conf:/etc/apache2/conf-enabled/serve-cgi-bin.conf
      - ./www:/var/www
    ports:
      - 80:80
    depends_on:
      - db
    restart: unless-stopped

  db:
    image: mysql:5.7
    ports:
      - 13306:3306
    volumes:
      - ./mysql/data:/var/lib/mysql
    environment:
      - MYSQL_ROOT_PASSWORD=jps
      - MYSQL_DATABASE=saichi_jps_sys
      - MYSQL_USER=test
      - MYSQL_PASSWORD=test
    restart: unless-stopped
```

図3 本番環境用のDocker-compose.yml

³<https://knowledge.sakura.ad.jp/16862/>

```
version: '3'
services:
  php:
    build: ./php
    volumes:
      - ./php/php.ini:/usr/local/etc/php/php.ini
      - ./php/apache2.conf:/etc/apache2/apache2.conf
      - ./php/000-default.conf:/etc/apache2/sites-enabled/000-default.conf
      - ./php/serve-cgi-bin.conf:/etc/apache2/conf-enabled/serve-cgi-bin.conf
      - ./www:/var/www
    ports:
      - 8080:80
    depends_on:
      - db
    restart: unless-stopped

  db:
    image: mysql:5.7
    ports:
      - 13307:3306
    volumes:
      - ./mysql/data:/var/lib/mysql
    environment:
      - MYSQL_ROOT_PASSWORD=jps
      - MYSQL_DATABASE=saichi_jps_sys
      - MYSQL_USER=test
      - MYSQL_PASSWORD=test
    restart: unless-stopped

  phpmyadmin:
    image: phpmyadmin/phpmyadmin:latest
    environment:
      - PMA_USER=root
      - PMA_PASSWORD=jps
    ports:
      - 8088:80
    volumes:
      - ./phpmyadmin/php.ini:/usr/local/etc/php/php.ini
      - ./phpmyadmin/sessions:/sessions
    depends_on:
      - db
    restart: unless-stopped
```

図 4 テスト環境用のdocker-compose.yml

コンテナ及び、システムプログラムは以下のような配置とした。

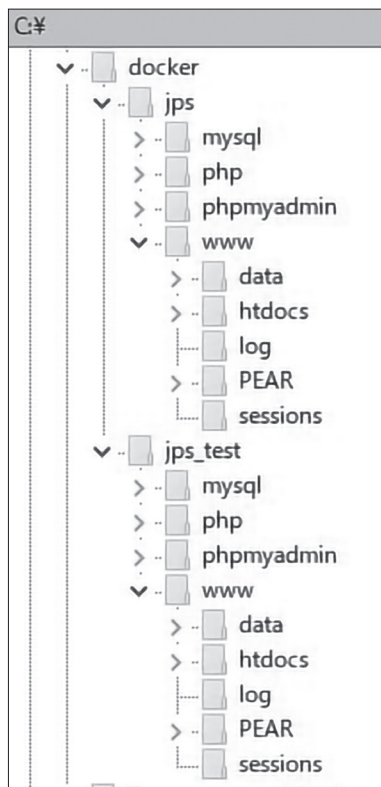


図 5 コンテナ及びシステムプログラムなどの設置ディレクトリ

各docker-compose.yml を利用してコンテナを起動することで、環境が構築される。

本番環境の構築

```
cd c:\docker\jps
docker-compose up -d
```

テスト環境の構築

```
cd c:\docker\jps-test
docker-compose up -d
```

初回起動時及び、構成変更時は、ネットワーク経由で環境構築に必要なプログラムが自動的に更新されるため、ネットに接続した状態の環境が必要となる。

(ア)-4) 管理データベースシステムの最新プログラムの反映

図5内のC:\docker\jps\www\htdocs 及び C:\docker\jps\www\data 以下にシステムの最新プログラムを設置した。

同様にテスト環境は C:\docker\jps_test\www\htdocs 及び C:\docker\jps_test\www\data 以下に設置した。

(ア)-5) 現行サーバからの置き換え

現行サーバとは異なる固定IPアドレスの割り当てを行った。*

日本写真保存センター内にてサーバとの置き換えを実施した。

コンピュータ名を引き継ぐため、現行サーバのコンピュータ名を変更したうえで、新たなPCのコンピュータ名をsaichi-dbとした。

ウィルス対策ソフトとして、日本写真保存センターで購入した対策ソフトを導入した。

現行サーバのDBダンプを取得し、新サーバにインポートを行うことでデータの意向を行った。

現行サーバの画像ファイル群を新サーバにコピーした。

※後日接続不良が発生したため、DHCPにより自動でIPアドレスを割り振る設定に変更した。

(イ) バックアップデータ取得時間の短縮

新環境移行に伴い、サーバ設定などを改めて見直したのち、環境構築後バックアップデータの取得テストを行い、短縮されたことを確認した。

(ウ) 資料群マスターに受入方法(寄贈・寄贈以外)の選択式入力欄を設置

受入方法を選択式にするため、辞書値に寄贈、寄贈以外の項目を追加するとともに受入方法項目をフラグ格納式に変更した。

すでに受入方法に入力されていた情報は、DB構造変更時に備考欄に追記する作業を実施した。

図6 受入方法の入力欄

(エ) コママスターの入力内容変更：

シリーズ名、タイトル、キャプションがコマに対し1つだけという、入力項目不足の解消を行った。

また、撮影者がはっきりしない場合に推定情報を付加したい場合が出てきたため修正を実施した。

1) シリーズ名の移動と項目の追加：

シリーズ名の入力項目を詳細タブに移動し、名称項目を追加した。

【コマ情報】

資料群番号： 00001
ホルダー番号： 00001-00002
コマ番号： 00001-00002-0001

【撮影年月日】

☐ 推定 ☐ 不明
西暦 1962 年 月 日 31 ~ 西暦 年 月 日 31

【撮影場所】

国： 日本
地域： 選択してください
都道府県： 選択してください
詳細：

国： ☐ 推定

詳細 被写体分類 掲載媒体 撮影者

シリーズ名： かな： 英文：
名称： 死の街の記録 かな： しのみちのきろく 英文： City of the Dead
プリント受領： ☐ 有 ☒ 無 詳細：

図 7 シリーズ名の移動と項目の追加

2) タイトルとキャプションの移動と統合：

タイトルとキャプションを掲載媒体タブに移動し、入力項目を統合した。また、掲載媒体ごとに入力できるよう修正した。

【コマ情報】

資料群番号： 00001
ホルダー番号： 00001-00002
コマ番号： 00001-00002-0001

【撮影年月日】

☐ 推定 ☐ 不明
西暦 1962 年 月 日 31 ~ 西暦 年 月 日 31

【撮影場所】

国： 日本
地域： 選択してください
都道府県： 選択してください
詳細：

国： ☐ 推定

詳細 被写体分類 掲載媒体 撮影者

媒体を検索して追加

掲載媒体	タイトル・キャプション	ページ 1	ページ 2	ページ 3	
軌跡 大東元の世界	T C かな 英文		p.126		削除
日本現代写真史展-終戦から昭和45年まで	T C かな 英文				削除

図 8 タイトルとキャプションの移動と統合

3) 撮影者に推定フラグを追加：

撮影者に推定フラグを入力できる項目を追加した。

図 9 撮影者に推定フラグを追加

6.2.2.3 管理データベースの今後について

今回の対応で環境のリプレースにより、動作の高速、安定化が見込まれるため、管理データベースの今後としては、主に運用、機能面で、以下の課題への対応展開が考えられる。

- ・ 受入情報管理拡充
- ・ 保管情報管理拡充
- ・ ストレージボックス情報管理拡充
- ・ 管理用データベースから閲覧用データベースへのデータ更新機能の付加
- ・ 他館連携に伴うデータベース構造の検討

6.2.3 閲覧データベースの開発について

前年度は管理データベースの構造変更に伴う表現変更を主体に修正を行った。

今年度は管理データベースの構造変更に伴う表現変更と、ジャパンサーチとの連携を行うための修正を行った。

6.2.3.1 修正点

下記の点について、修正が必要となった。

(ア) 管理用DBの変更：

変更に伴う表示内容の修正を行った。

(イ) 閲覧用DBのジャパンサーチ対応：

ジャパンサーチとの連携を行うため、DB詳細画面（詳細画像）への直接リンクを許可することとした。また、ジャパンサーチからの導線と閲覧用DBからの導線を混在させないようにボタンの挙動を修正した。

6.2.3.2 修正内容の定義

前述の修正点について、下記のように修正内容を定義し、作業を行った。

(ア) 閲覧用データベース 詳細画面について

- ・撮影者・団体、撮影年月日、撮影場所で推定フラグがオンの場合（推定）表記を行うよう変更した。
- ・名称項目を新設し、名称、かな、英文表記の項目を表示するよう変更した。
- ・掲載媒体情報を掲載媒体情報毎にナンバリングし、それぞれの掲載媒体情報と、タイトル・キャプション、かな、英文を表示するように変更した。

掲載媒体情報として表示する項目は、

媒体名、著作者・編者、発行年・著作年、発行地英文発行者（ページ1、ページ2、ページ3）

とした。

- ・所蔵項目の表記を、寄贈の場合は「日本写真保存センター」寄贈以外は空欄とするよう変更した。
- ・ジャパンサーチからの表示と閲覧DBからの表示で、画面の遷移方法が異なるため、画面下部のボタンの出し分けを行った

図 10 閲覧DB利用時
[新規検索画面] [閉じる]

図 11 ジャパンサーチ利用時
[新規検索画面] [前の画面に戻る]

(イ) 閲覧用データベース 一覧画面について

管理DBの構造変更に伴う表記の変更を行った。

文字情報は、

「撮影者・団体名」、「名称」、「撮影年」、「掲載媒体情報1」

の4行を表示する

「撮影者・団体名」は複数表示時においてはカンマ区切り

「撮影者・団体名」「撮影年」は詳細同様推定フラグがある場合は（推定）を表示する

「名称」はかな、英文を全角スペース区切りでつなげて表示する

「掲載媒体情報1」は媒体の名前を含む媒体に関する情報、タイトル・キャプション、かな、英文を全角スペース区切りでつなげて表示する



図 12 閲覧用DB 検索結果一覧表示

6.2.3.3 閲覧用データベースの今後について

閲覧用データベースの今後として、以下の課題への対応展開が考えられる。

- ・現状ではコンタクト画像の表示だけに関わるログイン機能の拡充
- ・他館連携方法について横断検索APIなどの検討

6.2.4 写真保存センターデータベースの今後について

今年度は、運用上の問題点の改善を引き続き行うとともに、ジャパンサーチ対応という、トピックスとなる対応を行った。これによる認知度、アクセス数の向上が見込まれる。

今後は、ジャパンサーチとの連携を軸にプロモーションを行い、認知度を広めると共に、収益モデルを見据えた運用方法やその開発が求められるであろう。

高瀬 博司	(凸版印刷株式会社	トッパンアイデアセンター	関西TIC本部	ICTソリューション部)
松本 亜須花	(凸版印刷株式会社	情報コミュニケーション事業本部	ソーシャルデザイン事業部	ソーシャルイノベーションセンター
		市場開発本部	社会政策営業チーム)	
寺師 太郎	(凸版印刷株式会社	文化事業推進本部	アライアンス開発部	アライアンス開発T)
小宮 広嗣	(凸版印刷株式会社	トッパンアイデアセンター	クリエイティブ本部	ビジュアルクリエイティブ部)

7 連携調査

7.1 写真原板データベースとジャパンサーチとの連携について

写真原板データベースは、調査済みの写真原板資料のうち、新聞雑誌写真集などに掲載されたと判明した写真原板のコマ画像を掲載している公開データベースである。写真原板データベースは2019年10月11日より、国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」との連携を開始した。

「ジャパンサーチ」とは、国立国会図書館を主体として、内閣府をはじめとする関係省庁、主要アーカイブ機関などとの協力の下、政府の「知的財産推進計画」の掲げる国のポータルサイトとして、様々な分野のデータベースのメタデータを統合し、横断的に検索・閲覧できるサイトである。ジャパンサーチで検索・閲覧可能なデータには、書籍、公文書、美術作品、文化財等、デジタルアーカイブ化されたあらゆるデータが含まれる。連携機関は、国立国会図書館を中心に、国立文化財機構、国立科学博物館、国立民族学博物館、立命館アート・リサーチセンター、国文学研究資料館、など日本を代表する博物館、美術館、公文書館、研究機関等で構成され、名実ともに日本のあらゆる分野のデジタルアーカイブの統合横断検索サイトとして機能し始めている。

ジャパンサーチとの連携のねらいは、これらの博物館、研究機関と同一のプラットフォーム上で写真原板資料を検索可能とすることで、写真原板資料の重要性を広くアピールし、広範な利活用を促進する点にある。

7.1.1 連携データの掲載方針

連携データは、写真原板データベースの掲載データを、項目名を含めそのまま掲載することを基本方針としたが、ジャパンサーチへの掲載に際して配慮が必要な項目について追加や編集を行った。

7.1.2 追加した項目

- ・「資料種別」

日本画、刀剣、公文書など、様々な資料が掲載されているジャパンサーチ内で、資料の種別を明確化するため、「資料種別」項目を追加し、内容を「写真原板」とした。

- ・「掲載媒体URI」

保存センターの「掲載媒体情報」（写真の掲載された新聞、雑誌、写真集の情報）を、他館の持つ詳細な書誌データおよびコンテンツと結びつけ、閲覧者の流動性向上および情報への到達の利便を図るため、ジャパンサーチに掲載中の書籍情報のURIを追加した。

- ・「原資料のURL」

ジャパンサーチの必須項目であるため、写真原板データベースのコマ詳細ページの個別URLを追加した。

7.1.3 掲載を見送った項目

- ・「被写体カテゴリー」「被写体キーワード」「印刷物掲載画像」

運用方法や内容を改善予定であるため、連携データへの掲載を見送った。

- ・公開に特別の許諾が必要な画像

写真原板データベースへの画像掲載に当たって、寺社の建築物など、被写体の権利者に特別の許可を得たものがある。これらのコマについては、ジャパンサーチへの画像掲載を見送った。

7.1.4 内容の編集を行った項目

・「解説」

掲載媒体から引用された著作権の高い文章が入力されているものは掲載を見送り、備考的内容のみを掲載した。

・「所蔵」

写真原板データベース上では全ての原板の所蔵情報について「所蔵 日本写真保存センター」と表示していたが、実際には寄託原板も存在しており、情報を正しく表示できていなかった。ジャパンサーチとの連携に際して寄贈契約締結済みの原板のみ「日本写真保存センター」寄贈契約を結んでいない原板は空欄を表示する事とした。

7.2 連携データ作成作業

写真原板データベースとジャパンサーチとの連携データは、データベースから出力されたメタデータと、連携に際し新たに作成したデータとを表計算ソフト上で並び替えることで作成した。詳細は表1写真原板DBとジャパンサーチの掲載項目名と内容を参照。

表1 写真原板DBとジャパンサーチの掲載項目名と内容

写真原板データベース		ジャパンサーチ	
項目名	内容	項目名	内容
撮影者・団体	撮影者	撮影者名	撮影者名
	撮影団体	撮影団体名	撮影団体名
タイトル・キャプション	タイトル・キャプション	タイトル・キャプション	タイトル・キャプション
		タイトル・キャプション(かな)	タイトル・キャプション(かな)
		タイトル・キャプション(英文)	タイトル・キャプション(英文)
掲載媒体情報	媒体名, 著者名, 出版年, 出版社, 掲載ページ	掲載媒体情報	媒体名, 著者名, 出版年, 出版社, 掲載ページ
		掲載媒体URI	ジャパンサーチに、他の機関により掲載されている掲載媒体情報のURI
撮影年月日	yyyy年mm月dd日	撮影年月日	yyyy-mm-dd
	yyyy年mm月dd日	～撮影年月日	yyyy-mm-dd
撮影場所	撮影国名 撮影都道府県名 撮影地詳細	撮影地(国名)	撮影地国名
		撮影地詳細	撮影地都道府県名, 撮影地詳細
原板種別	(ナイトレート・ガラス乾板) (原板・複写)(白黒・カラー)(ネガ・ポジ)	資料種別	写真原板
		原板種別	(ナイトレート・ガラス乾板)(原板・複写)(白黒・カラー)(ネガ・ポジ)
原板サイズ	ハーフ判・35mm判・6×4.5判・6×6判・6×7判・6×8判・6×9判・名刺判・手札判・キャビネ判・4×5判・5×7判・8×10判・その他	原板サイズ	ハーフ判・35mm判・6×4.5判・6×6判・6×7判・6×8判・6×9判・名刺判・手札判・キャビネ判・4×5判・5×7判・8×10判・その他
被写体カテゴリー	被写体カテゴリー		
解説	解説(掲載媒体文章の引用および備考)	備考	自由記述 解説欄に記入されている情報のうち、著作権の高い内容を削除し、備考的内容を記述(例: タイトルと、撮影地・撮影日時の食い違いの説明)のみを掲載する。
被写体キーワード・記述	被写体キーワード・記述		
コマ画像	コマ画像.jpg	代表画像URL	画像ファイルのURL
所蔵	日本写真保存センター	所蔵	寄贈→日本写真保存センター 寄託→表記なし
印刷物掲載画像	印刷物掲載画像.jpg		
コマ番号	コマ番号	コマ番号(ID)	コマ番号
		原資料のURL	公開DB コマ詳細ページのURL

7.2.1 連携データの詳細

変換に用いたテーブルは以下の通りである。

写真原板データベースから出力したメタデータファイル

- ・ コママスター (frame_master)
タイトル、撮影地、撮影年月日、原板種別、原板サイズ等、コマの基本情報
- ・ コマ掲載媒体情報 (frame_media_link)
どのコマが、どの媒体に掲載されたかを示す情報
- ・ コマ撮影者情報 (frame_photographer_link)
どのコマが、どの撮影者によって撮影されたかを示す情報
- ・ 媒体マスター (media_master)
媒体名、著者・編者名、出版年、出版社などの書誌情報
- ・ 撮影者マスター (photographer_master)
撮影者の氏名と経歴情報
- ・ 辞書値 (dictionary_master)
撮影国名、都道府県名、原板種別など定型で入力される値の辞書値情報

連携に際して新たに作成したデータ

- ・ 解説掲載許可コマ一覧
「解説」内容のうち、備考的内容のみが入力されているコマ番号情報
- ・ 所蔵情報一覧
所蔵先を「日本写真保存センター」と表示するコマ番号情報
- ・ 非公開画像一覧
ジャパンサーチ上では画像を表示しないコマ番号情報

7.3 画像サーバーの設定

ジャパンサーチ上で表示される画像は全て、写真原板データベースで使用している画像サーバーへのリンクを参照することで表示している。画像サーバーは、写真原板データベースからのアクセスのみを許可するよう設定されていたため、ジャパンサーチからのリンクにも対応可能な形に設定した。サーバー設定の実作業は、凸版印刷株式会社に依頼した。

7.4 写真原板データベースの導線の見直し

写真原板データベースは単独での公開を基本として設計されており、外部サイトからの閲覧者の流入には対応していなかった。従来の上では外部サイトからの閲覧者のページ遷移に支障をきたす事が想定されたためこれを改善した。写真原板データベースの設定作業は凸版印刷株式会社に依頼した。(詳細は6.2.3を参照)

7.5 連携の効果

ジャパンサーチとの連携前と比較して、写真原板データベースの公開データへのアクセス数が増加した。連携前、写真原板データベースの閲覧数は一日平均4.6件（2019年3月27日～2019年10月10日）であるのに対し、連携後は一日平均7.2件（2019年10月11日～2020年2月27日）と、約1.5倍となった。また、ジャパンサーチ上の閲覧数は一日平均12.0件（2019年10月11日～2020年2月27日 国立国会図書館調べ）であり、連携後の写真原板データベースの1日平均閲覧者数と合わせると、19.2件と、連携前と比較して約4.2倍の閲覧数となった。

7.6 まとめ

ジャパンサーチとの連携開始により、写真原板データベースは国内の著名な博物館、研究機関、公文書館と同一プラットフォーム上での検索・閲覧が可能となり、多くの閲覧者に対して開かれた公的なデータベースとしての役割と存在感を強めたと言える。

また連携開始により、データベースのより広い利活用に向けて解決すべき課題が明確化された。例えば、写真資料の利用に関わる権利表示について、文化財や人物の肖像など被写体の権利に配慮すべき写真の公開基準についてなどが挙げられる。これらの課題について、日本写真保存センターの扱う写真原板資料が、多くの博物資料や公文書等とは異なり、著作権の保護下にある作家の作品を多く含む点も考慮しながら、解決への糸口を探っていく必要がある。いずれにせよ、資料画像の公開と利用については、ジャパンサーチの連携館においても共通の課題として認識されており、課題解決に向けた取り組みは日本写真保存センターのみならず、日本におけるアーカイブ機関全体の利益に資する可能性が高い。ジャパンサーチとの連携を通じて改めて明確化された課題を、データベース全体の広範な利活用を推進するための課題と捉え、これらを解決するための取り組みを今後も継続してゆく。

河原 健一郎（調査員）

8 情報発信、その他

8.1 本年度の情報発信と利活用

日本写真保存センター（以下センターとする）では、昨年度までで「写真原板アーカイブ」の基本となる「収集」、「調査」、「物理的保存」、「情報整理」について、適切と思われる方法が固まった。

本年度は、蓄積した情報を広く閲覧に供し、より多くの人々に活用していただくことを課題として、情報発信を強化した。具体的には、今までの調査で集積した「写真原板」情報をより広汎に発信するために、2019年10月より、国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」との連携開始を行った。（詳細7章）

また、センターの活動自体についての情報発信も行った。情報発信は、紙媒体と、ウェブ媒体で役割を分け、センターのウェブサイト (<http://www.photo-archive.jp> 2020年2月28日確認) での情報発信を基本としつつ、紙媒体での広報物として、センターの活動を紹介するリーフレット第2弾の制作が進行している。セミナーも引き続き開催し、「ジャパンサーチ」との連携をテーマに成果の発信を行なった。また、本年度は、デジタルアーカイブ学会でショートプレゼンテーションも行った。セミナー、ショートプレゼンテーションへはデータベース連携に関心を持つ層が多く来場し、写真資料のデジタルアーカイブ化について、有意義な意見交換が行えた。

利用については、主として教育・研究利用目的の申込みがあった。写真原板を保存する機関他からのセンター見学希望も増え、写真原板の適切な保存、調査、データベース化について切実な関心を持っている層が多いことが実感された。

8.1.1 ウェブサイト

引き続き、センターのサイト上で情報発信を行なった。閲覧DBの掲載コマに869コマを追加し、合計6,753コマとなった。本年度追加したコマの内訳は、渡辺義雄380コマ『日本の塔』、若目田幸平4コマ『東京のちょっと昔』、辻本満丸5コマ『日本植物油脂』『海産動物油』、写真協会131コマ『写真週報』、岩波写真文庫348コマ『岩波写真文庫』。

8.1.2 印刷物

印刷物による情報発信の第2弾として、本年度は写真原板権利者へ向けた日本写真保存センターの活動紹介についてのリーフレットの作成を日本写真保存センター委員会で決定し、『いまは写せても、過去は写せない。一貴重な写真原板を後世に。日本写真保存センター活動紹介』を制作が進んでいる。リーフレットは、随時、最新の情報に更新できるように、データのみを作成する。

8.1.3 展示・セミナー

〔常設展〕

昨年度に続き、センター作業分室では、所蔵している写真原板からプリントをした写真の展示を行っている。2019年12月24日には展示替えを行い、現在は名取洋之助、江見写真館、佐伯義勝、南良和、山崎治雄、浅野隆、吉田潤らの作品計18点を展示している。

【セミナー】

page2020オープンイベント「日本写真保存センター」セミナー（詳細8.2）

「写真原板データベースとジャパンサーチとの連携 ―写真原板のより広い利活用を目指して―」

日時：2020年2月5日（水）14:00～16:30

会場：池袋サンシャインシティ文化会館7階710号会議室（豊島区・東池袋）

主催：公益社団法人日本写真家協会

プログラム：

「国の分野横断統合ポータル『ジャパンサーチ』について」

講師：中川紗央里（国立国会図書館電子情報部電子情報企画課）

「写真原板データベースの特徴と、連携により見えてきた課題について」

講師：河原健一郎（日本写真保存センター調査員）

概要：2019年10月よりセンターの「写真原板データベース」が、国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」との連携を開始したことを機に、本セミナーでは「写真原板データベース」と「ジャパンサーチ」について、それぞれの機能や将来に向けた取り組みを説明した。「ジャパンサーチ」との連携については美術館、博物館、企業史料室関係者など各層の関心が高く、質疑応答では充実した意見交換が行なわれた。

参加者：63名

【ショートプレゼンテーション】

デジタルアーカイブ学会 公開セミナー「ミュージアムとジャパンサーチその可能性と課題―」

日時：2020年2月20日（木）13:30～17:30

会場：東京大学工学部2号館 93b教室（文京区・本郷）

主催：デジタルアーカイブ学会

概要：デジタルアーカイブ学会が主催した本公開セミナーは、ジャパンサーチの推進主体と資料及びそのデータを保有するミュージアム、そのデータの運用を担う開発者が、情報共有と相互の理解促進を目的に開催された。

日本国内の様々な文化的コンテンツを横断的に検索できる国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」の試験版（β版）が2019年2月に公開され、日本写真保存センターでは、同年10月に「写真原板データベース」を連携した。今回のジャパンサーチとの連携では日本写真保存センターの「写真原板データベース」で既に公開されている6,753コマの作品をジャパンサーチから検索することが可能となり、日本写真保存センターの写真原板資料の利用促進と、日本写真保存センターの活動のアピールにつながればと考えている。

またジャパンサーチとの連携では、写真原板データベースの公開データに、ジャパンサーチで公開中の掲載媒体の書誌情報URIを付加して検索精度を高めた。その結果として写真原板データベースの閲覧者数も増加傾向である。

ショートプレゼン後のポスター展示の個別質問では、美術館関係者からは「展示作品の記録写真の写真原板が沢山溜まり保存整理に困っている、整理やデータ化のみ作業してもらえるか」の質問が有り。日本写真保存センターでは寄贈頂いた写真原板の保存と公開が業務で、日本写真保存センター作成の保存に関するリーフレットを使用して説明した。聴講者数は約60名であった。

講師：河原健一郎（日本写真保存センター調査員）

8.1.4 利用

利用については、渡辺義雄、岩波文化財写真、笹本恒子らの写真原板への希望があり、教育用書籍、研究書、教育的報道番組などで利用された。

8.1.5 見学

センター作業分室へ以下の訪問見学を受け、情報交換を行なった。

8.1.5.1 山崎治雄の写真記録を保存顕彰する会会員

山崎治雄（やまざき はるお）は岡山生まれの写真家。彼が撮影した旭川ダム関連問題の記録等の写真原板をセンターで所蔵しており、それらは先駆的ドキュメンタリー・プロジェクトとして評価されている。

日付：2019年5月23日（木）

訪問者：会員、1名

8.1.5.2 合同会社AMANE

合同会社AMANEは、学術資源と情報資源化業務を研究者の視点から行っている。科学研究費補助金取り扱い規定第2条第8項に規定する研究機関。

日付：2019年5月28日（火）

訪問者：研究員、1名

8.1.5.3 高知県立美術館 石元泰博フォトセンター

高知県立美術館は、高知県高知市にある美術館。高知ゆかりの写真家・石元泰博の写真コレクション等で知られる。

日付：2019年7月11日（木）

訪問者：学芸員、1名

中川 裕美（調査員）
小泉 洋一（事務局長）

8.2 「日本写真保存センター」セミナー

8.2.1 セミナー概要

■ セミナー名

page2020オープンイベント 「日本写真保存センター」 セミナー

「写真原板データベースとジャパンサーチとの連携－写真原板のより広い利活用を目指して－」

■ 開催日時

2020年2月5日（水） 14：00 ～ 16：30

■ 開催場所

池袋サンシャインシティ文化会館7階710会議室

■参加者：63名（事前予約者44名）

■セミナー内容

日本写真保存センターが公開しているインターネット上のデータベース「写真原板データベース」では、明治初期から大正、戦中、戦後、平成に至るまでの、日本各地の風俗や事件、人々の姿などの出来事が写真撮影技術により後世に伝えられ、その写真原板約6,800点をご覧いただけます。「写真原板データベース」は2019年10月に「ジャパンサーチ」との連携を開始しました。ジャパンサーチとは我が国の知的財産推進計画として、内閣府主導で進められている「国の分野横断統合ポータル」で、数々な分野のデータベースを横断的に検索・閲覧出来るサイトです。写真原板データベースとジャパンサーチとの連携により、日本写真保存センターが公開中の資料と他館が公開している数々の資料とを、同時に検索・閲覧することが可能となり、写真原板資料が今まで以上に幅広い層の方に、様々な方法で利用出来るようになりました。本セミナーでは連携について担当の、国立国会図書館電子情報部電子情報企画課担当者と日本写真保存センター連携担当者が講演を行いました。

■講演のテーマ

1. 「国の分野横断統合ポータル・ジャパンサーチ」について

講師：中川 紗央里（国立国会図書館電子情報部電子情報企画課）

2. 「写真原板データベースの特徴と連携により見えてきた課題」について

講師：河原 健一郎（公益社団法人日本写真家協会日本写真保存センター調査員）

8.2.2 セミナーまとめ

page開催初日に開催されるオープンイベントの日本写真保存センターセミナーも8回目を迎えた。今回のセミナーは国立国会図書館の電子情報部電子情報企画課の連携担当者に講演をお願いし、日本写真保存センターの「写真原板データベース」との連携について日本写真保存センターの担当者と共に、日本写真保存センターで公開中の6,753コマの作品についてジャパンサーチ上では数々の資料で検索可能となっていることが説明された。

初めに日本写真保存センター代表で2019年度文化勲章を写真分野で初めて受章された、一般社団法人日本写真著作権協会の会長田沼武能より日本写真保存センター立ち上げから13年経った保存センターの現状と写真原板保存の必要性が語られ、皆様の活動支援と協力をお願いする挨拶で講演会がスタートした。

講演前半の国立国会図書館電子情報部電子情報企画課の中川紗央里さんからは、「ジャパンサーチ」とは内閣府知的財産戦略推進事務局の方針のもと、国立国会図書館が試験版（β版）のシステム運用を行う「国の分野横断統合ポータル」で、ジャパンサーチが集約したメタデータは利用しやすい形式で提供され、コンテンツの利活用を促進する基盤となる。今回日本写真保存センターの「写真原板データベース」と連携したことで、他館が公開している様々な資料とを同時に検索・閲覧することが可能となり、写真原板資料を今までよりも幅広い層の方に様々な方法で利用頂ける。また二次利用の条件や著作権の扱いに関しても説明が行われた。休憩を挟み後半は、日本写真保存センター調査員の河原健一郎氏から「写真原板データベースの特徴と連携により見えてきた課題」について講演がおこなわれ、写真原板の説明からスタートし、日本写真保存センターの簡単な紹介や写真原板のメタデータは、いつ、どこで、だれが、何を、どのように、の情報を大事にしている。2019年10月からジャパンサーチとの連携を開始して開始して新しい視点で日本写真保存センターの写真原板

データベースが利用出来るようになった。連携の方針は公開データベースの内容を出来るだけそのまま変換し、掲載媒体名と共にジャパンサーチ上で公開されている書誌情報のURIを追加している。また連携を通じて日本写真保存センターとしては、既に公開していたセンター公開データの見直しを行う良いきっかけとなり、少しバラツキのあったメタデータ内容も修正出来たとの説明が行われた。講演の最後に質問時間を設けたが、2名の参加者から数件の質問があり、保存センターでの「原板収集基準の説明」や「ジャパンサーチや写真原板データベースでの作品公開基準」、「プロの撮影作品についてジャパンサーチでは公開を意識しているのか」、「デジタル写真の長期保存法について」等の質問があった。最後に公益社団法人日本写真家協会副会長の松本徳彦より「今後も日本写真保存センターのアーカイブについて多くの方からご意見を頂きたい」との終演の挨拶でセミナーが終了した。

セミナー開催の会場の設営作業と撤収作業には、公益社団法人日本写真家協会の保存センター委員会メンバー6名の協力により、短時間で言う事が出来た。

今回の来場者数は63名（事前申込者は44名）。配布物は、「写真フィルムの保存」という当センターの活動成果から得た写真フィルムの適切な保存方法の紹介をしたA4版4ページに印刷したパンフレットを受付で全員配布した。また問い合わせの比較的多い、写真原板を長期保管する中性紙の包材の総合カタログを資料保存器材さんから会場に提供され、ほとんどが持ち帰られた。

小泉 洋一（事務局長）

9 支援組織

日本写真保存センターの活動を時系列に要約すると、2006年「日本写真保存センター」の設立発起人会を開催して、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立しました。代表には森山眞弓、副代表に田沼武能が就任して文化庁に「設立要望書」を提出し、文化庁は日本写真家協会に「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を委嘱事業として予算化（900万円）が開始されました。2007年からは活動も本格化し、調査の為にフランス・イギリス・アメリカ等の施設調査も実施しました。2011年から「文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究」（1,800万円に増額）に発展し、収集・保存調査の他にアーカイブ構築に関する調査にも着手出来ました。これまでに収集・保存調査を終えた写真原板を2012年には文化庁から貸与を受けた「国立映画アーカイブ相模原分館」の収蔵庫（125m²×4部屋の合計500m²に室温10℃、相対湿度35％）に収蔵出来る事になりました。そして2014年写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げ、本支援組織も2019年度で6年目に入りました。支援組織の設立や現在までの経過、そして支援組織の一般社団法人日本写真著作権協会が日本写真保存センターの作業スペースの拡大の為に、台東に借用した保存センター作業分室についても報告致します。

9.1 保存センターと支援組織について

文化庁からの調査研究費だけでは、保存センターの調査活動に限界があり「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援するための組織」を設立した。保存センターの活動を写真関連業界中心に支援する為、キヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フイルム株式会社の3社が幹事社となって公益社団法人日本写真家協会の賛助会社を中心に支援組織会員への参加を呼びかけた結果、賛助会社として写真や印刷に関連する企業や団体から賛同が頂け、2019年度では12社1団体の13会員に支援いただいています（以後はキヤノン、ニコン、富士フイルムと略称表記します）。

■ 支援組織会員（2020年3月時点 12社・1団体の13会員）

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

オリンパス株式会社

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

凸版印刷株式会社

株式会社ニコン

一般社団法人日本写真著作権協会

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレームマン

（50音順）

9.2 支援組織の経緯について

- 2013年06月 支援組織準備の3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）と協議会
- 2014年01月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
- 2014年05月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
- 2014年10月 支援組織会社12社による初の「支援組織会議」を開催
- 2015年04月 支援組織が14会員となる（1社・1団体が増）
- 2015年08月 「原爆展」（展示：JCIIサロン）に支援会社が協賛
- 2016年04月 支援組織が13会員となる（1社が減）
- 2016年11月 「渡辺義雄展」（展示：ポートレートギャラリー）に支援会社が協賛
- 2017年03月 保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
- 2017年06月 「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会に支援会社3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）から10名が参加
- 2018年03月 「後世に遺したい写真」（展示：みなとみらいギャラリー）に支援団体が協賛
4日間の写真展開催に約7,000名が来場した
- 2018年06月 「国立映画アーカイブ・相模原分館（2018年4月に独立）」見学会に支援会社4社（凸版印刷株式会社、オリンパス株式会社、株式会社写真弘社、株式会社キタムラ）と文化庁から合計10名が参加
- 2018年10月 「後世に遺したい写真」写真展・講演会（光村グラフィック・ギャラリー）
10月25日～11月24日の開催期間中1,100名が来場した。10月25日のオープニングに支援組織各社も参集頂け90名が来場
- 2019年01月 「日本写真保存センター・作業分室」を日本写真著作権協会のご協力により台東に開設
- 2019年11月 「国立映画アーカイブ相模原分館」見学会に日本写真家協会保存センター委員会メンバーと文化庁担当者から合計10名が参加

9.3 支援組織の支援内容について

支援組織から「日本写真保存センター」への具体的な支援として、調査作業室の整備、備品等の調達、調査員の活動費、収蔵の為に中性紙の包材等の消耗品、アルバイトの人件費などへの費用補充としている。また日本写真保存センター調査活動を広く広報する為の、セミナーや講演会、研究会などの活動費や各種資料、図録などの印刷宣伝費などにも使用しています。

また支援組織の3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）については、事業運営に必要な要員支援も実施しています。具体的には支援組織会員会社のうち1社から常勤の業務管理者（事務局長担当者）1名を日本写真保存センターへ派遣し、保存センターの業務を手助けしています。過去の実績として、キヤノンから1名2014年1月から2017年4月まで派遣されました。2017年3月からはニコンより2020年3月までの予定で常勤の業務管理者が派遣され、保存センターの事務局長として日常の管理業務を中心に勤務しています。今後は富士フイルムより2020年春から後任の事務局長が派遣される予定です。

9.4 支援組織の「台東作業分室の設置」支援について

日本写真保存センターは、「日本写真保存センター作業分室」として、2019年1月15日より、御徒町に一部半蔵門に保存センター本部スペースを残し、主要作業を行う職場を移転致しました。移転先の物件については、「一般社団法人日本写真著作権協会」が家主と契約して「日本写真保存センターの作業分室」として、日本写真著作権協会から借用している。大量に寄贈された写真原板の調査、収集、保存の作業を迅速に進める為には、ワンフロアに仮保管スペースや作業スペースそして受取スペース兼打ち合わせの出来るスペースが必要です。以前のスペースと比較して約3倍のフロア面積となり、3つのエリアが平面移動可能で、仮保管スペースも24時間空調管理が可能となり、諮問会議や支援組織会議も作業分室で開催可能となりました。

9.5 その他の支援状況

また本年度から公益社団法人日本写真家協会の「保存センター委員会」から積極的な活動の支援も頂いています。本年度は委員会のメンバーに保存センターの活動をより深く理解頂くため、写真原板を長期保存している、「国立映画アーカイブ相模原分館の見学会」を11月の入庫作業時に開催し、入庫作業見学と長期保存のプロセス理解と保存コストの大きさを、相模原分館の現場を見学して実感して頂いた。

イベントの広報支援では、「写真原板データベースのジャパンサーチとの連携」セミナーの開催案内や、WEBサイトでのイベントPR、保存に関する啓蒙活動に対しても、支援会員の協賛や参加で積極的に協力をいただいています。

今後は業種を広げた支援組織会員を増加させ、現在集まっている未処理の原板に対して、作業を促進させる為の、ボランティア要員の確保や、支援各社からの要員紹介などの形で支援をお願いしている。

小泉 洋一（事務局長）

10 まとめ

これまでに収集した文化財関係の写真に『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』と渡辺義雄の『伊勢神宮』『新宮殿』『迎賓館』『日本の塔』などがある。ここにきて西川孟の「桂離宮」「京都御所」「龍安寺」「西芳寺」などと京の庭園を捉えたそれぞれ豪華な写真集に掲載された1万点余に及ぶ写真原板を収集することができた。これはまさしく日本文化の粋をなす世界的遺産の写真群である。

また、岩宮武二の世界遺産のインドネシア「ボロブドゥール遺跡」も素晴らしい。こうした二度と撮れない遺産を記録し遺すことができるのが「写真」である。保存センターの目玉になる写真原板の充実が期待されている。

日本の近代産業遺産を捉えた山口直のカラーポジも時間が経てばたつほど貴重な記録として利活用される。島内英佑の『吉野川ふたむかし』も残しておきたいドキュメントである。

これから写真が教育書籍への利活用が始まる。それには図鑑類によく使われている高野伸二の「日本の野鳥」や清水清の「食虫植物」などの写真原板の活用が期待される。こちら方面の写真にも注力する必要がある。

さらに内閣府知財本部が推進する「ジャパンサーチ」に参画し、記録された写真群の利活用が望まれている。ここでもこれまでに蓄積したノウハウを生かせる 때가迫っている。

3月に入って京都の浮世絵版画美術商の芸艸堂から、明治から大正にかけて撮影されたガラス乾板が多数あり、必要であれば寄贈したいと連絡あり。調査に伺ったところ倉庫にうず高く積み上げられた版木や美術印刷に使用されたガラス乾板が多数見つかった。

撮影内容は古い時代の衣装を着た人物像や友禅などの染色見本、衣装の文様など、その時代の特色が残るガラス乾板多数。岡本東洋が撮ったと思われる乾板（犬や鳥の生態写真）、小川一真が撮った「町家」と佇まいなど、キャビネサイズのガラス乾板（イルフォード製）約1万枚。諮問会議に諮って収集の可否を決めようと保留して帰った。大正初期の印刷用ガラス乾板から製版用フィルムが面付された状態のものなど多数が破棄されようとしている。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

本年度受け入れた写真家の作品



岩宮武二 ポロブドゥール東面全景



岩宮武二 ポロブドゥール 仏伝 「夢占い」

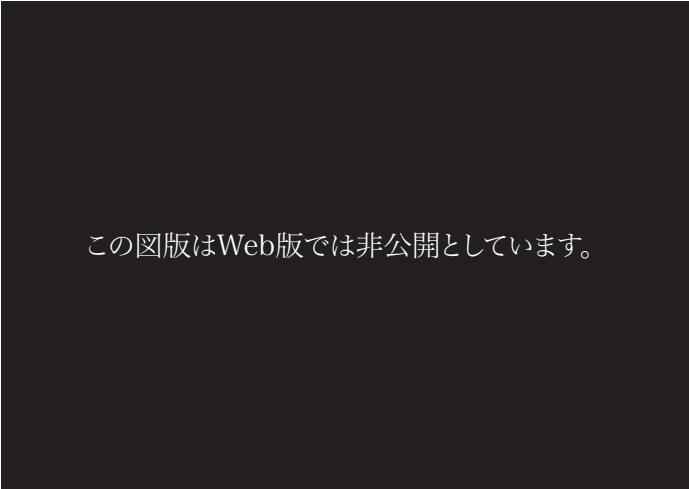


島内英佑 吉野川



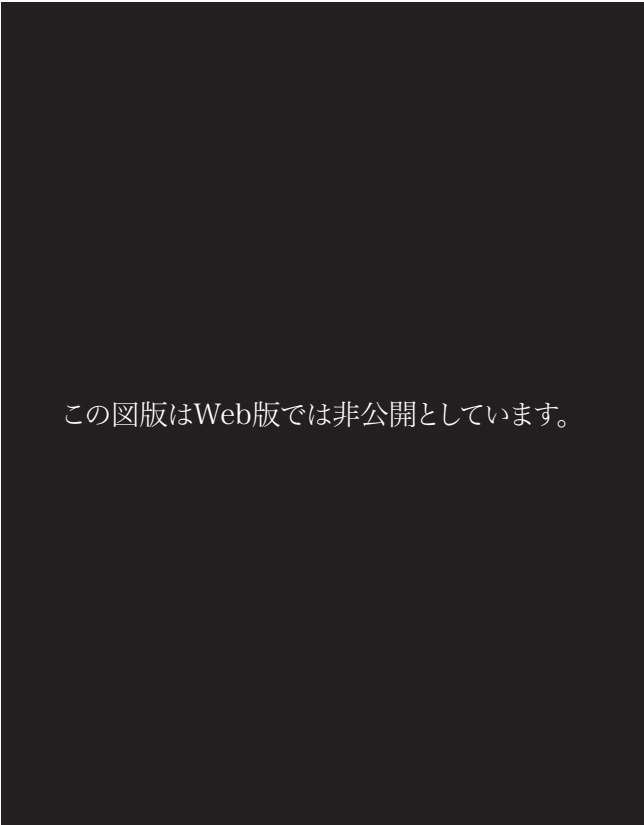
高田昭雄 橋脚になった島

本年度受け入れた写真家の作品



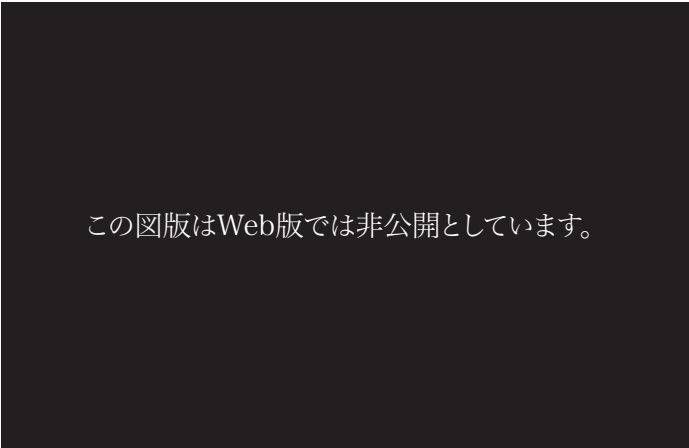
この図版はWeb版では非公開としています。

西川孟 京都御所 紫宸殿より承明門をみる



この図版はWeb版では非公開としています。

西川孟 桂離宮 御輿寄前坪庭



この図版はWeb版では非公開としています。

西川孟 桂離宮 御殿群遠望

本年度受け入れた写真家の作品



山口直 技術史の旅 錦帯橋



山口直 技術史の旅 ガス圧縮機



高野伸二 野鳥写真 シロハラ



清水清 食虫植物

page2020 写真原板データベースとジャパンサーチとの連携



禁無断転載

令和元年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報告書

令和2年3月 公益社団法人日本写真家協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCHビル

TEL:03-3265-7451 FAX:03-3265-7460

<https://www.jps.gr.jp>

E-mail:info@jps.gr.jp

